キラリ 輝いてます!

日本のパントマイム界の草分けとして

人の喜怒哀楽を体だけで表現する

ヨネヤママママコさん（毛呂本郷）

（撮影　肥後隆男氏）

■マイムを知る

ママコさんがパントマイムと出会ったのは、1954年。東京でパントマイムの神様と称されるマルセル・マルソーの公演を見たときであった。「その時は、体中に衝撃が走りました」と語るママコさん。もともとバレエを習っていた父親から基礎を教わり、東京教育大学（現筑波大学）入学後には、モダンバレエを学んでいた。その公演は、そんなママコさんに「これだ」と思える出会いをもたらした。

「当時私は、感情の起伏が激しい性格でした。人の喜怒哀楽を体だけで表現するマイムは、その感情を掬い取ってくれるものでした」とママコさんは語る。

■アメリカでの生活

ママコさんは、大学在学中に処女作『雪の夜に猫を捨てる』を発表した。このダンスマイムが激賞され、ママコさんの周囲は一変。テレビ出演など多忙を極めるようになった。「マイムを始めて、すぐに有名になってしまったので、あのころは稽古ができませんでした。そのようななか、自分は何がしたいのか。何を表現したいのか。自分探しをしていました」と当時の苦悩を振り返った。

1960年、ママコさんは、アメリカへと旅立つ。アメリカでは、多くの大学の劇団でパントマイムを教えながら、パントマイムの基本カリキュラムを作った。「アメリカでの生活は決して楽ではなかったのですが、マイムの勉強はたくさんできました。日本の良いところを見つけたのもアメリカでの生活があったからだと思います」とママコさんは語る。そして、1972年帰国。帰国後、ママコ・ザ・マイムスタジオを設立する。

1993年、パントマイムに歌と語りを加えて演じる「パンカゴ」という形式を確立した。79歳となった今も、公演や後進の指導にと現役で活動を続けている。

■ママコさんと毛呂山町

そんなママコさんが、毛呂山町に住み始めたのは、今から3年前。きっかけを尋ねると「川が好きなので、素敵な川の近くで暮らしたかったんです」と答えるママコさん。都会での暮らしから自然の多い毛呂山町へ移住。今の暮らしが気に入っているという。

「先日公演に行ったある場所で、同年代の人たちから、励ましの言葉をいただきました。この年になると肉体的な衰えを日々感じますが、その分、心での表現をできる限りやっていこうと思っています」と笑顔で話してくれた。

日本のパントマイム界の草分けにして現役のパントマイマー。ママコさんは、まだまだ演じ続ける。

ヨネヤマ
ママコさん

パントマイマー・
振付師・舞踏家

日本のパントマイムの草分け的存在として、その生涯をかけてパントマイムを演じる。代表作に「新宿駅ラッシュアワーのタンゴ」、「禅とマイム～十牛」、「月に憑かれたピエロ」など。79歳